

國學院大學學術情報リポジトリ

伊豆山神社所蔵「紺紙金泥般若心経〈後奈良天皇宸翰／（伊豆国）〉」の伝来について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗木, 崇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001116

伊豆山神社所蔵

「紺紙金泥般若心経（後奈良天皇宸翰／（伊豆国）」

の伝来について

栗 木 崇

はじめに

走湯権現は伊豆権現、走湯山と呼ばれ、箱根権現（箱根神社）とあわせて二所と称され、三嶋社（三嶋大社）とともに東国政権の守護神として崇敬を受けたことはよく知られ、現在も伊豆山神社には多くの社宝が伝わっている。その中のひとつに重要文化財「紺紙金泥般若心経（後奈良天皇宸翰／（伊豆国）」（以下、伊豆国『心経』とする）がある。諸国に奉納された後奈良天皇自筆の般若心経のひとつで、伊豆国『心経』が伊豆山神社に伝来した経緯は不明となっている。^①しかし、一般的にこれらの般若心経は諸国の一宮に納められたとされていることから、一説には明治初期に三嶋大社の国宝「梅蒔絵手箱」と交換したともいわれている（太田一九八七）^{②③}。

本稿ではこの伊豆国『心経』が伊豆山神社に伝わった経緯について、若干の所見を述べてみたい。

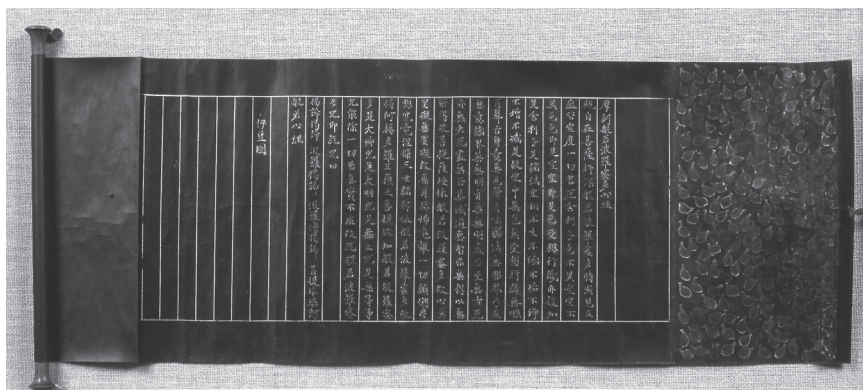


図1 紺紙金泥般若心經〈後奈良天皇宸翰／（伊豆国）〉

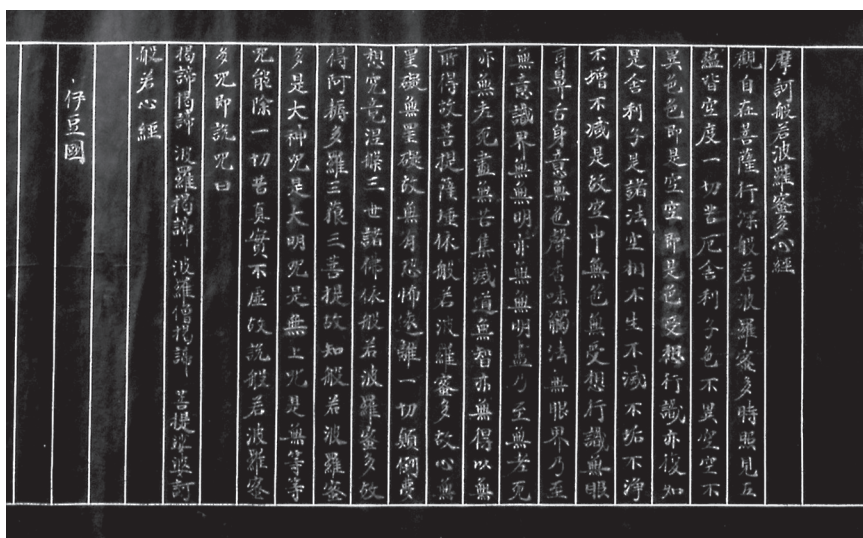


図2 紺紙金泥般若心經〈後奈良天皇宸翰／（伊豆国）〉（拡大）

一、伊豆国『心経』の状況

伊豆国『心経』の法量は縦幅27.1cmで横幅は86.5cm（見返し16.0cm・第一紙49.0cm・見返し21.5cm）を測る。軸は金属製で長さ32.5cm、軸端が撥形となり最大幅2.8cmとなる。紺紙に金泥を用いて、見返しに散華を描き、罫線を引いた中に内題「摩訶般若波羅蜜多心経」、次の行から17行にわたって般若心経を書写し、一行開けて「伊豆国」と記している（図1・2）。

昭和二年（一九二七）四月二十五日に重要文化財（書籍・典籍）として指定されているが、翌年十一月の伊豆山神社の『寶物古文書台帳』（コピーが現存）には「宝第三十六号」の項として「心経」「壹卷」「長九寸／巾二尺三寸五分／紺紙金字／表紙金泥蓮華」「社伝云北條氏康所書写也／後奈良天皇御宸筆」「文孚博士伊木寿十氏後奈良天皇ノ御宸筆ナラント云々（國宝）」と記載されており、上の枠外には「…四月二十五日…省告示…」と追記されている（図3・4）。

伊木寿一は東京帝国大学史料編纂官（当時）であり、『寶物古文書台帳』の記載内容から伊木寿一の調査によって北條氏康所書写と伝わっていた「心経」が後奈良天皇宸翰であることが明らかに、重要文化財指定（当時は国宝）になったと考えられる。明治初年の『伊豆山神社取調上申書』の中に「一心経 壹卷 社伝云、北條氏康所書寫也⁴」とあることから、伊豆国『心経』は江戸時代末には北條氏康の書写と伝わっていたのであろう。

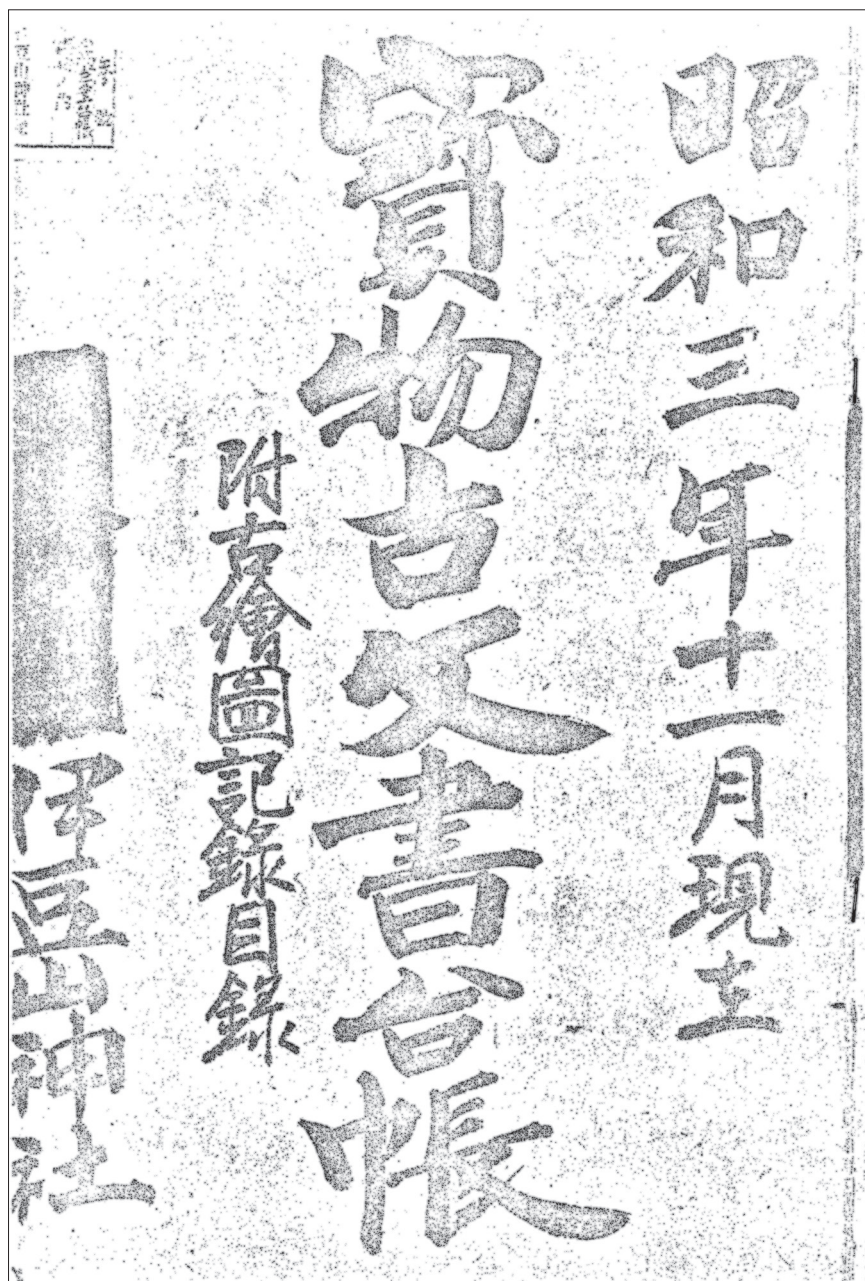


図3 伊豆山神社『寶物古文書台帳』表紙（コピー）

(西暦)
一六二二
一六二三
一六二四
一六二五

心經	心經	心經	心經	心經	心經
年々正大 日々月	年々正大 日々月	年々正大 日々月	年々正大 日々月	年々正大 日々月	年々正大 日々月
号八三第室	号七三第室	号六三第室	号五三第室	号四三第室	号三三第室
心經	心經	心經	心經	心經	心經
三卷	三卷	三卷	三卷	三卷	三卷
表紙白地金鏤	表紙白地金鏤	表紙白地金鏤	表紙白地金鏤	表紙白地金鏤	表紙白地金鏤
長八寸五分 巾三寸五分	長八寸五分 巾三寸五分	長八寸五分 巾三寸五分	長八寸五分 巾三寸五分	長八寸五分 巾三寸五分	長八寸五分 巾三寸五分
寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)	寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)	寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)	寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)	寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)	寶永六日五月初 本多下總守 藤原康成(箱書)
桐箱入	桐箱入	桐箱入	桐箱入	桐箱入	桐箱入

表紙赤地錦

図4 『寶物古文書台帳』の伊豆国『心經』該当部分（コピー）

二、後奈良天皇宸筆の般若心経が作製された歴史的背景

伊豆国『心経』を含め、後奈良天皇宸筆の般若心経が諸国に奉納された経緯については先学により明らかになっているが、簡単に述べると、後奈良天皇はこれより前の天文三年（一五三四）に疫病流行の終息を願い、嵯峨天皇の例に倣い般若心経を書写して大覚寺に奉納した。同八年の凶作に続き、翌九年には飢饉疫病起り、京では毎日六十名の死体が捨てられるという惨状（『嚴助往年記』）において、また般若心経を書写し、醍醐三宝院の義堯僧正に修法を行わせた。大覚寺に奉納されたものには「頃者疾疫流行民庶憂患……醍醐寺にも「今茲天下大疫万民多阨於死亡……為疫病之妙藥矣」と奥書があり、ここから疫病流行の終息の意図が読み取れる。

安房国あての般若心経とともに京都の曼殊院に伝わる各国への伝達者の名前を書きあげた目録『心経被遣諸国覚』によって、天文十四年に至るまでに多数の心経を謹書し、同年二月二十一日までに河内より近江までの十八か国の伝達者が決定し、それよりのちに伊豆国を含めた残り六か国が決定、国々は合わせて二十五か国に及ぶことが確認できる。

現存する「心経」は7件あるが（表1）、受領者が判明しているものは越後、甲斐、肥後の3件で、長尾晴景、武田晴信、阿蘇惟豊が受領している。また曼殊院には陸奥国の蘆名盛舜が受領したことを示す請文が伝わっており、それぞれ各国の有力な戦国大名である。しかし奉納先については、肥後のみ阿蘇社と女房奉書で指定されているが、一宮についての言及はなく、現存する史料群からは、諸国の一宮であることが奉納先の決定的な要因であったことは確認できない。

表1 現存する「心経」一覧

旧国名	現所有者	伝達者 未遂含む	戦国大名	備考	重要文化財指定年月日
伊豆	伊豆山神社	聖護院道増	北條氏康	江戸時代には北条氏康の書写と伝わる	一九二七年 四月二五日
越後	上杉神社	勤修寺尹豊	長尾晴景	長尾晴景あての諭旨あり	一九三八年 七月 四日
安房	曼殊院	報恩院源雅	里見義堯	伝達者が下向できず	一九一六年 五月二四日
甲斐	浅間神社	聖護院道増	武田晴信	天文十九年四月二十日の武田晴信の添書あり	一九〇五年 四月 四日
三河	西尾市岩瀬文庫	三条公頼	今川義元	京都の古書店より岩瀬弥助が購入	一九五七年 二月十九日
周防	周防国分寺	烏丸光康	大内義隆		一九一〇年 四月二〇日
肥後	西蔵殿寺	烏丸光康	阿蘇惟豊	阿蘇社へ奉納を指示する女房奉書あり	一九〇六年 四月十四日

三、伊豆国『心経』がもたらされた頃の駿豆国境の状況

当時伊豆国を支配していた小田原北條氏と駿河の今川氏は甲斐の武田氏に対抗するため同盟関係であったが、天文六年に武田と今川が同盟したことによって、北條氏は駿東地域（河東）に攻め込み富士吉原まで占拠し、今川と対立することになった（第一次河東一乱）。

同十年に北條は氏綱から氏康に代替わりし、武田も晴信（信玄）のクーデターにより信虎が駿河に追放され、北條と武田で関係改善が図られながらも小競り合いが続いており、同十三年に東国へ下った連歌師宗牧は『東国紀行』に「駿豆再乱」と記していて、すでに不穏な状態であったようである。

翌十四年、聖護院道増が三月二十六日以降に駿河へ行き、四月二日に甲府、七月七日に駿河にすることが確認され

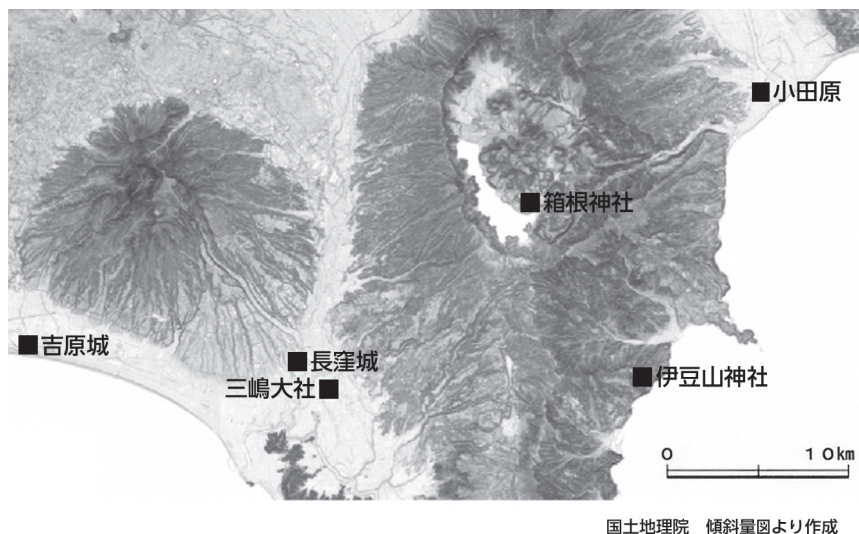


図5 関係地位置図

ており、『為和集』『高白斎記』、この間に小田原へ行き、和陸仲介の使者としての役割を果たすとともに般若心経を北條氏に渡したと思われる。しかし和陸には至らず、八月には今川義元が出陣し、九月十六日には吉原城が陥落、北條軍を三島まで退却させ、九月二十一日には長窪城（駿東郡長泉町城山）に義元の本陣が置かれた。十月二十九日になって北條氏が駿東地域を放棄することで和陸が成立し、駿東郡は今川側に引き渡されることになった（第二次河東一乱）。

このことにより、伊豆半島の西側の三島周辺が両者の境となり、北條、今川、武田の同盟が破棄された後には武田が駿東に侵攻するたびに紛争地域となっている。長窪城と三嶋大社の直線距離は四km弱と近接しており、仮に伊豆国『心経』を強奪、滅失された場合、伊豆国を支配する立場としての面目が潰れることになり、特に代替わりしたばかりということもあって、北條氏としては三嶋社への奉納はリスクがあると考えられることは当然と思われる。

おわりに

最後に伊豆国『心経』の伝来経緯をまとめると、まず、天文十四年までには写経され、二月二十一日以降に伝達者が聖護院道増に決定し、三月二十六日～七月七日の間に駿府から甲府へ行き、駿府に帰るまでの間に小田原へも寄り、三者の和睦の仲介を行うとともに北條氏へ渡されたと考えられる。その後の奉納については、他国の事例から奉納先が一宮であるかどうかは重要な要件でなく、甲斐では奉納の時期が受領から五年後の天文十九年と時間差があったり、越後のようにそのまま大名家の手元に残った例もあることから最終的には受け取った戦国大名に委ねられていると思われる。伊豆国『心経』を受領した北條氏としては河東の乱の後も度々紛争地帯となるような伊豆・駿河の国境に近い三嶋社に奉納するよりも、伊豆半島の東側に位置して比較的安全であり、三嶋社、箱根山と共に東国政権の守護的な走湯山を選択したと考えられ、江戸時代には天皇の宸翰ということが忘れられても北條氏康の書写という形で北條氏からもたらされたという記憶が伝わっていたのではないだろうか。

註

- (1) 大場磐雄「官國弊社寶物物語」『神社協會雜誌』第三十六年一號昭和十一年による。
- (2) 『山梨県史 文化財編』平成十一年など、山梨県、愛知県、山口県のホームページでも諸国の一宮に奉納したと説明されている。

- (3) 地元の郷土史家の太田公男氏の著作『熱海物語』昭和六十二年には次のように述べられている。「多分、明治

維新頃般若院別当後の伊豆山神社の神主、大谷能憲が妻を、三島大社の（矢）田部盛治の妹を迎えた時に一緒に持ってきたといわれています。その際、伊豆山神社にあった東山殿十二之手箱と伝えられる北條政子の梨地に菊枝の蒔絵の箱入一組を三島神社にもっていったといわれています（伊豆山古老伝）。」

（4）神道体系編纂会『神道体系 神社編二十一 三島・箱根・伊豆山』平成二年による。

（5）赤尾栄慶「御奈良天皇宸翰「般若心経」解説篇」・下坂守「御奈良天皇宸翰「般若心経」資料篇」『御奈良天皇宸翰紺紙金泥般若心経』平成元年などを参照。

（6）工藤敬一「シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介10 重要文化財 阿蘇家文書（34巻36冊）」『東光原熊本大学附属図書館報』平成六年を参照。

謝辞

本稿の写真図版の掲載にあたっては伊豆山神社禰宜大鳥居素氏、MOA美術館尾西勇氏には大変お世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。